
パパと呼ばれたい

大沢 綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パパと呼ばれたい

【Nコード】

N0937X

【作者名】

大沢 綾子

【あらすじ】

某ゴンドラメーカーに勤務する米田耕作43歳。
このおじさんの夢は、娘に「パパ」と呼ばれることだったか???

BL小説のシリーズ「おまえが嫌い」番外編！ BL小説の登場人物ですが、彼はちがいます。したがって、そういう描写は一切ありませんので、ただ、楽しんでご賞味下さいませ。

(注) 本編はムーンライトノベルズにて連載中

米田耕作 43歳。

大阪府と言つのもはばかられるような、和歌山県との境にある町の出身である。はつきり言つてド田舎の、野趣があふれかえった自然しか売り物のない町だ。そしてその名が示す通り、彼の両親は息子が生まれた時に山肌へばりつくようになつてある、たんぼと畑を継いで欲しいと願つていた。

しかし、そこで育つた米田少年は、ある時自分そっくりな父親に叫んだ。

「オレな、百姓なんかイヤやねん！ もっと、でっかい仕事をやりたいんやっ！」

11歳 小学6年生の時である。子供の米田は「なんか」と言つて、親父に拳固で張り飛ばされている。

それはともかくその夢は、田舎を飛び出して大学に行き、卒業してから叶えた。願望成就である。数度の転職のあと、34歳の時だ。それまでの間に米田が増やした資格は多い。一例を上げれば「危険物取扱主任者」などがそうである。それもこれも、米田にとっては計算づくでの事だった。

そして 念願の「でっかい仕事」についた。

建築の世界、しかも仕事場は常にビルのでっぺん。場合によっては、100メートルを越える場所でビル風に吹かれ、寒さに凍え、暑さに参りながらの現場仕事だ。そして米田の両親は、息子を何故かヤクザな仕事に就いていると思ひ込んでいた。

可哀想な事に、米田はちゃんとした上場企業の課長さん待遇なのが、両親にとっては日雇いの現場作業員と似たようなもので、区別がつかないらしい。もっとも、米田も普段からラフな格好で出勤すると、作業服にすぐに着替える。その姿でどこへでも行つて、どこへでも登る。ヘルメットに安全帯、軍手に安全靴は米田のアクセサ

リーだった。いまや背広姿の米田など、つきあいの長い支店長の後藤でも想像不可能である。

なのに　ある日の米田は朝からピシッとスーツ姿で出勤してきた。

某ゴンドラ・メーカー関西支店のフロアは、その朝いつしゅん沈黙に包まれていた。あとから出勤して来た連中も、朝礼の輪を形作りながら見ないように、見ないようにしている。

なぜか。

似合っていないのだ。

米田は、身長はそこそこあるものの、土くれのついた掘りたてのゴボウのような男だった。食っても食っても太らない体質と、年から年中現場仕事で紫外線にさらされた肌は真っ黒。しかもそれは、土方焼けである。額の上辺りだけは地肌の色で、ほかは真っ黒だからヘルメットを取ると妙にしまらない。そういう顔で、年代物のデザインのスーツを着て立っている。襟の幅が広くて、ネクタイも幅広。つまりは、景気が良かった頃に流行ったデザインなのである。

それはまるで、これから漫才の舞台に立つ芸人のような感じだった。だから、全員微妙に視線を外す。まともに見れば、笑いそうで怖い。笑えば　米田は支店にいるほとんど全員の先輩格だ。年齢もそうだが、支店での勤続年数も長い。だから、なんとも失礼なことになってしまうのである。

が、米田はみんなの感想を聞きたくて仕方がない。

今日がどういう日なのか、言いたくて仕方がない。

そして、似合っていると行ってほしくて仕方がない。

そういう気持ちでウズウズしながら朝礼を終えても、誰もなににも言ってくれなかった。

米田は、だからといって引き下がるような男ではなかった。そそくさと離れて行くこうとする後輩をひとり、とっつかまえる。

「な、なんです、米さん」

捕まったのは、メンテナンス・チームのリーダー藤堂だった。

藤堂は、元暴走族という経歴の男である。昔はかなり派手に暴れまわっていた、という過去がある。河内生まれの河内育ち。まかり間違つて迷いこめば、暗がり引きずり込まれて袋叩きに遭うほど恨まれている地域もあるらしい。しかし、前科はない。そういう馬鹿な暴れ方をしない、ある意味分別のある男で、すでに結婚もして子供もいた。上の息子は中学生　かなり早い結婚だった。

「なあ。なんで、訊いてくれへんのか」

米田は、藤堂の高い所にある顔を下から覗きこんで言った。藤堂の困惑顔などお構いなしだ。

「なあ！」

「わ、わかりましたよ」

と藤堂が大きなため息をついて、観念しきつた表情で訊いた。

「米さん、今日はまたえらいキメてはりますけど、支店長と一緒に営業ですか」

やっと待ち望んだ質問に、米田は大声で、しかも嬉しそうに否定した。

「ちやうねん！」

「ちやうんですか」

「俺な、今日はな、早退するんや」

言つてから、藤堂の反応を見るように一瞬黙る。が、藤堂が何も言わないために、気のきかんやつちや、と呟く。そこで諦めずに、米田は「なんで、つて訊きいや」と督促する。いつの間にか、その場所を遠巻きにして、支店の連中がこつそり集まっている。誰しも、米田のいでたちの理由が知りたいらしい。その輪に加わっていないのは、事務チームの鳥井と支店長ぐらいだ。二人ともすでに、数日前に米田からの早退届を見て知っている。

「なんでですか、米さん」

「上の娘のな、参観日なんや!!」

この格好で行くのか　と、周囲が思ったかどうか。ともかく米田はやっと答えられて大満足だ。上機嫌のまま藤堂を離すと、ス

キップしながら自分の監督している部署のブースに入って、パソコンに向かって仕事を始めていた。

米田には、ささやかな夢が幾つかある。

そのうちの一つはすでに叶えた。色白でもつちりした肌の妻を持つ事で、米田の嫁さんは、その通りの容姿に加えてちよつとばかりふっくらしすぎている。そして、常に鉄砲玉みたいな亭主に似合いの、おっとりした性格だ。その事を、米田は本当に感謝していた。子供が生まれるまでの米田は、その嫁さん会いたさにどんなに遅くなくても帰宅した。米田の愛妻家ぶりは、社内でも有名である。そこへ子供が生まれて、ますます帰るようになった。米田の子煩悩ぶりを、支店で知らない者はない。なにせ、米田は自分の子供を自慢する事はなほだしい。知りたくなくと、米田の妻や娘がどういう人柄かは、誰もが知っている。

その米田の二つ目の夢は、娘に「パパ」と呼んでもらう事だった。「パパ」という言葉に対する米田のあこがれは、どうにも強い。父ちゃんとか、お父さんでは駄目だ。パパ　なんともリッチで甘い響きがあるではないか、と米田はそれに憧れていた。しかし、現実には家で米田はお父さんと呼ばれている。だから、その夢を叶えたかった。それが、自分の風貌や性格に似合っていない事は、米田の念頭にはない。なんとしても、パパと呼ばれたい。

そこには、米田の子供の頃の記憶が大きく原因していた。

米田がまだ小学三年生の時に、田舎の小さな学校にいつとき転校生がやってきた。都会からの転校生というのは、普通は苛められたりするものだが、その少女の場合は別格。いかにも都会から来た、という感じに話し方も身動きも服装も垢抜けて、色白で可愛い少女だった。小児喘息のために、父親の転勤先にすぐには一緒に行けず、療養も兼ねて祖母の家に母親と一緒に引っ越してきたのが、米田たちの前に現われた理由だ。

その少女にぼーっとなったのは、米田だけに限らない。身体が弱くて体育を見学する、という事自体その町では珍しい。それに妙に皆あこがれて、女子までが彼女にぼーっとなつてしまつた。急におとなしくなつてしまつたクラスの女子に、男子は調子が狂い、そして同じようにその少女にぼーっとなつた。

その彼女が、たまたま担任と話すために学校に現われた父親を、パパ、と呼んだ。

背が高くてスマートで、バリツとした三つ揃いのスーツを着たその父親の姿に、米田は別人種を見た思いがし、それ以後ずっと、いつか娘にパパと呼んで欲しいと願うようになったのである。

(娘を持ったら、絶対にパパやないとあかん！)

と、米田は思いこんでいる。そう呼ばれる事は、子供の頃に見たあのカツコイイお父さんの姿に重なるからだ。が、現実はちがう。それがどうにも、米田は承服しかねていた。

ええか。学校ではパパ言うんやで。

と、この授業参観に行くにあたって、米田はよくよく娘に言い聞かせている。自分の腰あたりまでしかない娘の前にしゃがみこみ、小さな両肩をぎゅっとなめて、念押しした。一年生になつたばかりのその娘が、なんだか妙な顔をしたまま「うん」と言つたため、米田は期待に胸をふくらませて支店を早退した。

翌日の米田は、昨日の上機嫌が嘘のように静かだつた。それはそれで、米田という男のキャラクターにはあまりに不似合いなため、やはり朝礼に参加したメンバーは黙っている。服装は見慣れたいつもの作業服。しかし、こんなに沈んだ米田は珍しい。

「ヘルメット、よし。足元確認、よし」

と、指差し呼称で安全確認をやる、その声もおとなしい。朝礼が終われば、すごすこと自分のいるべき工事チームのブースに引つ込んでしまつた。みな調子が狂って仕方がなく、ついに営業チームの

サブ・リーダー北原が、藤堂にこっさり耳打ちする始末だ。北原は過去五番目に早い昇格ペースで役職に就いた男だ。今年の五月に、やっと二八歳になる。背が高く、バランスの取れた体格とその男っぽい容姿で、営業先の女子社員にモテている。

「藤堂さん、訊いてみて下さいよ」

と北原が言えば、藤堂が嫌そうに目を合わせてくる。二人はほとんど同じ背の高さ。横を向くだけで十分だ。

「われ、俺やないと、あかんのけ」

目上でなければ藤堂は、つい河内弁になる。

「いや、昨日の今日だし」

「勘弁せんかい」

というやりとりの間に、ほっそりとしたスーツ姿が米田のブースに入っていく。設計チームのリーダー吉村だ。彼は、男にしては肌がかきれいで、独特の瞳を持っている。それほど背は高くはないが、頭が小さいために実際より高く見えた。一見すると静かでおとなしい印象で、それを縁なし眼鏡がクールに整えている。歳は北原と同じ歳。同期入社だ。

彼の骨の形の美しい手には、A3サイズの図面が握られていた。

「米田さん」

と言って入っていくのを、北原と藤堂が注視していた。二人の耳に、元気がない米田の「なんや」という返事が聞こえてくる。

「高崎ビルの屋上レベル図面が、仕上がりましたけど」

いつもなら、こういう時の米田は手放しで嬉しいがる。大げさなくらいに嬉しがって図面を受け取るタイプの男で、それが皆に満足感を与えた。褒めたりするのがむしろに上手い男だが、その日だけは、それがなかった。

「米田さん、朝からどうしたんです？」

ついに、吉村が訊いた。それは、とうとう地雷原に踏み込んだよくな恐怖を、北原たちに与える。いつ踏むか、いつ踏むか、とドキドキする事はなほだしい。それをまた、滅多にやりそうにない吉村

がやった、というのがなおさらスリリングだ。

「昨日、授業参観だったんでしょ？」

核心をつきやがった、と北原が口の中で呟いていた。

「あのな、吉村ちゃん」

「はい」

「俺なあ、パパ言ってもらうのが、夢やってん」

「パパ、ですか」

吉村がおうむ返しに答えている。それを笑わないのは偉い、と北原たちは内心思う。米田の風貌に「パパ」はないだろう、と突っ込みたいところだ。

「でな、昨日はちゃんとそう言うてくれる約束をしとったんや。それがな」

「それが？」

「俺には似合わん、言いよるねん。なんか、変やて。お父さんは、やっぱりお父さんやねんて」

嘆く中身と米田のその果てしなく落ち込んだ様子は、どうにもミスマツチ。北原も藤堂も、なるたけ視線を合わせないようにしながら、笑い出すのを苦勞して抑えている。その悩み自体はむしろ、米田らしくて面白い。

「お父さんじゃ、駄目なんですか？」

と、別に笑いをこらえている様子もなく、吉村が訊いている。それは、本気で不思議がっていた。

「パパって、確かにスマートな感じでしょうけど。お父さんの方が、頼もしくていいじゃないですか。陽気で楽しくて、頼り甲斐がある感じでしょう。米田さんには、ぴったりですよ」

一瞬、その場に沈黙が落ちる。

やがて、そうか、という米田の呟きが聞こえた。

「そうか……そうか！ 吉村ちゃん、俺は頼もしいお父さんか！」
別に立たずともいいのに、米田が席から立ち上がった。

「ええ」

「そうか！」

やっと、米田がいつもの米田耕作に戻っている。いや、いつもより元気だ。おおきに！と米田が吉村の肩を叩いて、俄然はりきる。

「なんや、元気が出たぞー！ よっしゃー、今日もいっちょようやるかい！」

机の上のヘルメットを手にすると、必要な書類を抱えてブースを飛び出す。

「え、あの……。米田さん、この図面」

呆然としている吉村に、北原が声をかけていた。

「たいしたもんだ」

吉村の表情は、釈然としないまま。両手に持った広げた図面に視線を落として、呟く。

「これ、期日せつつかれてたんだけどな」

「ま、ええんとちゃう？」

と藤堂が言い、吉村はそれを米田の机に置いていた。

米田耕作 43歳。

名前は耕作だが、やる仕事は農業ではなく、でかい建築物に何百キロもあるゴンドラを載っける大きな仕事。関西支店のムード・メーカーで愛妻家。その男は今日も、トレードマークの作業服にヘルメット姿で、あちこちの現場を駆けまわっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0937x/>

パパと呼ばれたい

2011年9月27日13時33分発行